

ネパールにおける「性差別による暴力廃絶活動の16日間」

バラティ・ポッカレル（ネパール）

2016年12月の最初の週に、私はインドのマウント・アブで開催された会議に参加しましたが、その際にウルミラ・トリパティさんという女性に会う機会がありました。一緒に話をするうちに分かったのですが、トリパティさんはもともとネパール西部に位置するネパールガンジ市出身だということでした。彼女は女の子を出産した経験があるのですが、その子が生まれてから夫や義理の両親から差別的な扱いを受けるようになったのだと話してくれました。その子を出産する前から、家族から「男の子を産んで欲しい」と言われ続けていたそうです。彼女も最初のうちはそのような理不尽な扱いに耐えようとしました。それでも我慢できず、村落開発委員会（地方行政の最小単位）に相談したところ、「自らの運命だと思って黙って受け入れなさい」と言われたそうです。やがて義理の両親が一線を越えるような言動に出始めたため、彼女は自分の身を守るために家から逃げ出しました。そして、インドのマウント・アブにあるブラマ・クマリス世界精神大学の門を叩き、そこでボランティアとして残りの人生を捧げる決意をしたということです。ネパールでは、他にも何千人という女性や女兒たちが、家庭やコミュニティで同じように差別的な扱いや暴力を受けているに違いありません。しかし残念ながら、誰もがトリパティさんのように自力でシェルターを見つけ、平穏な暮らしを送るチャンスを再び手に入れられるわけではないのです。

遠い昔から、ネパールでは家父長制的価値観が根深く浸透しており、このような女性に対する不当な扱いや残虐行為を助長する元凶となっています。こうした不正行為の被害者である女性や女兒たちにとって、抗議の声を上げることは極めて難しいことです。なぜなら、世間の人々や警察を含む公的機関は、このような事案を犯罪や人権侵害に当たるとは見なさないからです。ネパールの新憲法やその他複数の政策・法律文書は女性の基本的人権を守る内容となっていますが、このような法令の執行や実施はこれまで決して十分ではありません。それは人々の意識に植えつけられた家父長制意識や信念こそが、最大の障壁となっているからです。従って、人々の意識を変えることには、的を絞った関連プログラムを早急に開始することが極めて重要です。

2016年、ネパールでは世界中の多くの国々と同様に、11月25日の「女性に対する暴力撤廃の国際デー」に合わせて様々な啓発活動が国全体で行われました。さらに、その日から12月10日の「世界人権デー」までの16日間は「性差別による暴力廃絶活動の16日間」と銘打ったキャンペーン期間に定められています。

このキャンペーン期間中は、市民社会組織(CSO)や国内・国際非政府組織(INGO/NGO)の主導のもと、数多くの取り組みが16日間にわたって展開されました。その中で、これらの組織は中央政府や自治体の関係部署と緊密な連携を図りながら、様々なプログラムを実施しました。啓発活動の一環として、コミュニティでの集会、義父母を対象としたワークショップ、夫婦が参加するクイズ大会、配偶者同士の意思疎通に関するワークショップ、地域の学校や大学での特別講演会、コミュニティによる演劇など、多彩な内容の催しが企画されました。さらにこれらの催しには、女性と男性の両方の参加を促すような工夫もなされました。中には、女性と男性の参加促進を図るため、交通費や日当などのインセンティブを支給するものもありました。このような努力が奏功し、プログラムは大成功を収めて目標とする参加人数を達成したと、主催団体の多くが報告しています。

この16日間のキャンペーンを実施したことで、女性に対する暴力撤廃の機運が全国で高まったことは称賛すべきことです。しかしながら、この機運をいかにして持続するかということが最も重要な課題として残ります。なぜなら、このキャンペーンに参加した関係者の大半が、16日間のキャン

ペーンが修了すると間もなく、期間中に示したコミットメントについて忘れてしまう傾向が見られるからです。地元住民たちは、支援機関による取り組みの多くが一時的なものであると感じており、そのために地元の受け入れ体制が十分に整えられないことに不満を抱いています。同様に、このような取り組みを行うことで得られる便益の主な部分は支援機関や実施団体に奪われ、地元は残されたわずかな便益しか得られず置き去りにされているという批判も出ています。一方で実施団体側は、コミュニティが現金や寛大なインセンティブ欲しさに活動に参加していると批判しています。ネパールでは何十年にもわたって国内・国際 NGO による介入が行われていますが、その割には社会経済面での目立った発展は見られません。そのため、このミスマッチを解消するための検証を行う必要があります。この状況を注意深く分析することで、真にネパールのためになるような国際協力の道筋に光が当てられることになるのです。これは何も女性のエンパワーメントに限ったことではなく、開発セクター全般についても当てはまります。トリパティさんのような女性が自宅やコミュニティで安心して過ごすことができ、しかるべき敬意を払われるようになって初めて、支援機関や実施団体は「性差別による暴力廃絶活動の 16 日間」キャンペーンが目指す目標が達成されたと言えるのではないのでしょうか。

